

# 福祉と幸福の自覚のためにー不幸は必要かー

近藤良樹

## 1. 幸福と不幸の相互移行

一点の不快・苦痛も、ときには、幸福をくつがえすことがある。健康・家庭・仕事等の全般にわたって、順調で、幸福そのものというようなところに、一点の不運な事態が生起して不幸につきおとされることもある。その不運がささいな事柄であれば、幸福をくつがえすことはないが、事故で両足切断などとなると、他の事柄のひきつづく順調さにもかかわらず、おそらくはその幸福は不幸にと一転する。

ショーペンハウアーは、ほかの事態はすべて調子がよくても身体の一点が痛いとそこにのみこころは向き、不快になること、あるいは、多くのことがうまくいっていても、たった一つ気がかりがあると、それへと意識は集中し楽しまなくなることを指摘する(註 1)。この機制は、生を維持するためには理にかなったことである。こころよいところとか、痛みのないところというのは、その生の部分が順調で放っておいてよいところである。それは、したがって、意識されることも少ないものとなる。逆に痛むところとか、不幸なことがらに結び付くようなところは、放っておくとその生を否定し痛めて障害をもたらすわけで、それには、できるだけ意識を向けて、その否定的な事態をなくしたり阻止するようにと注目していくことが必要となる。ということで、不快で不幸をもたらすようなことにと意識は向き、その結果、かりに快適さ・めぐみが多くあっても、それは意識からは消えてしまって、痛み・不幸にとらわれて、痛みを苦悩する存在、不幸な存在となりがちなのである。単純化していえば、幸福のためには、あらゆることがらが幸福(満足)でなくてはならないのに対して、不幸になら、たった一つの不幸でも十分不幸になれるということである。

幸福は、「全般的満足」でなくてはならないとヘーゲルは言い(註 2)、カントは、それは、「あらゆることが望みや意志どおりにいっている」(註 3)ことだと捉えていた。痛みや苦悩がその生の「全般」に対してさして影響しない、ささいなものであれば、問題はない。しかし、そうでない場合は、それがたった一点のことで他のすべては満足いく状態であっても、その重大な一つの不満足状態によって、「全般」の満足はなくなり、幸福ではなくなってしまうのである。その一点が、その人の人生に決定的であれば、幸福をもたらす他の諸満足は、背後に引っ込んでしまい無と化して、「不幸」と自身をみなしていくことになる。

しばしば、幸福な生を一点の不幸な事態が転覆し、不幸な生とするのだが、その逆もまた時には可能である。現在の状態について、不運つづきで、子供は受験に失敗し、自分は、胃潰瘍になり、会社では左遷されてと、「不幸」を嘆いていても、たまたま手にした宝くじの類で百億円が手にはいったとしたら、ほかならぬ「万事がお金」の現代社会のこと、事態は、またたくまに、幸福の方向へと方向転換できるのではないか。若いうちの苦勞については、その時にはみじめな思いをして「不幸」を嘆いていても、その苦勞によって鍛えられてやがてそのみのりが社会的な成功となり、功なり名をとげて「幸福な人生」という総括のできるときがある。そのときには、若い日の不幸は、幸福の栄養源と振り返ることができ、幸福の不可欠の土台・手段とみなされて、幸福のうちに組み込まれ、幸福の輝きによって輝くものとなるのが可能であろう。

とはいえ、幸福から不幸への転倒と違って、不幸から幸福への転倒は、そう簡単には生じない。その不幸の原因そのものが解消されたのであれば、幸福になりうるが、そうではなく、他方面での幸い・恵みが得られたのみの場合、そのめぐみの輝きがすべてを照らして幸福色にとよい方向に影響を与えていくとしても、不幸の痛み・苦悩は、常に意識を覚醒し、これを忘却させてはくれないのである。幸福のもたらすめぐみが、その苦悩そのものを解消するのではないかぎり、不幸は、幸福へと転倒はしない。幸福から不幸への転倒では、その幸福なめぐまれた状況はそのままに維持されていても、新規の一点の不幸が全体を不幸とすることが可能である。しかし、不幸から幸福への転倒では、さまざまな不幸の基本部分が解消される必要があり、また、通常は一点の幸福では、とうてい幸福とはならず、幸運・恵みがいくら与えられても、それによって不幸そのものを解消してしまうか、大したことはないと思直して、これを無化するのではなくてはならないから、この転倒は、より困難さをもっているといわなくてはならない。しかし、ひとは、しばしばこの転倒を求めて努力を重ねていくのである。

時間は、さきに進むばかりで、さかのぼってはくれないから、過去の不幸な出来事そのものを変更することはできないが、それへの解釈・評価は、変更できる。のちの人生の展開の中で、しっかりとした幸福な人生が招来できたならば、さきだつ不幸は、自分を悩ませる足かせではなく、鍛えてくれた恵みとなって、幸福へ至る道程・手段と解釈しなおすことが可能となる。メルヘンの典型的な結びは、ハッピーエンディングである。それには、まずは、「シンデレラ姫」のように、めぐまれぬ、あるいは、苦勞の多い、そのまま終われば「不幸」といわれねばならないような事件なり状況があつて、この「不幸」の過程

を経てはじめて、「幸福」はもたらされるのである。最後のものが決定的となって、それへの過程としての不幸は、幸福の実りのための大切な試練の時と位置付けられる。それがあからこそ、幸福が可能になるものと見なされているのである。最後の幸福の輝きによって、先行する不幸は、意義深い、苦勞のしがいのある、価値豊かなものと解釈しなおされ、はじめからの全体は、一言でいえば、「幸福」な物語と捉え直されることになるのである。「終わりよければすべてよし」ということである。

われわれの生は、生物として「生命」をもち、これを土台にしてその上に家庭を中心にした人間的な衣食住の生活があり、社会的な活動があって、文化的な精神的な生として成り立っているということができる。この成層からいうと、その各層を総括したその全体が「全般的満足」をすることができているならば、人は、幸福だといえるのであろう。しかし、それらの層のうちの一つが重大な否定的な事柄でおびやかされることになると、それにとられる状態になると、他の満足はそのままであっても、その一点に全体は支配されて不幸となりがちである。逆に、不運な状態がいくつかあって不幸をかこっていても、一つの決定的な事態がその人の生の全体を満足させるにたるようになっていくなれば、幸福になりうる。

一般的にいうならば、土台になり下位の層をなしているものが上層のものをおびやかすほどの苦痛・不快にとらえられることがなければ、成層をなす全体の幸不幸は、その人の人生の生きがいとなるような重要性をもった生のかなめの部分の満足・不満足によっておおむね決定されることになるであろう。身体的には、そんなに元気ではないけれども大病をするでもなく大禍なく過ごせ、家庭やお金についても、めぐまれているとはいえないにしても、さして気にかかることもないというような状態のもとに、その人の生きがいが芸術活動にあって、これにめぐまれた満足のいく成果をえることができおれば、その人は、幸福と自身をみなすことができるであろう。

しかし、その人の生の下位層のものであっても、土台となって支えることができないほどにこれがダメージを受けた場合、たとえば、大病で重い心身の後遺症がそのひとを悩ますことになったりすると、上位の層で満足・めぐみがあったとしても、これが下位の苦痛・苦悩を鎮めることができないかぎり、その全体をなす幸福な「生」は、自身を不幸と決定していく可能性が高くなることであろう。

## 2. 不幸の無が即幸福

エピクロスやショーペンハウアーは、苦しみのないことが幸福だという。たしかに、痛み・苦悩することがなければ、心配がなければ、ここは穏やかで安らぎ、それは、消極的ではあるが満ち足りた状態であり、幸福といえるであろう。ショーペンハウアーは、苦痛は意志の「抑制」として成立し、「苦痛は積極的に感覚され」るものであって、これをなくするところに幸福はなる、「苦痛の非存在が生々の幸福の尺度だ」と論じている(註4)。

我々は、いくら富みをつんでも、めぐまれていても、これをうけとめる心において、心配したり、悩んでいたりしたのでは、満ち足りた幸せな気持ちになることはできない。富みがあろうとなかろうと、不満とするところがなく心配するものがなく、苦悩するところがなければ、安らかで幸福感をもつことができる。佐藤一斎『志言叢録』は、「禍なきを以て福と為す。・・餒ゑ(うえ)ざるを以て富と為す」(註5)といい、あるいは「貧に安んずるの心、即ち富なり」(註6)という。「貧しい」と思うところがなければ、彼は豊かであり富んでいるのである。「めぐまれていない」「わざわざに苦しめられている」と思い悩むところがなければ、彼のここは、穏やかで、満ち足りて、幸福でありうる。

苦痛・苦悩のないこと、不幸のないことが幸福だというわけだが、われわれの幸不幸の自覚が、反省をもって、とくに比較をもって成り立つこと、幸福は、不幸との対比において、これのない幸福、となっていることが多いのはたしかである。ひとが「健康」を喜び、これを意識するのは、多くの場合、反対の「病氣」になって、これから回復した当座のことである。幸福を思うのも、不満足之苦痛・苦悩にあえいだあと、これから解放されて、「苦痛・苦悩のない」ことが意識される当座のことであり、不満・不幸のないことが当り前の幸福の持続する状態では、もはや、幸福は意識しないものである。

苦痛・苦悩のないことが幸福だといっても、それは、消極的な幸福にすぎず、快楽、価値あるものを獲得しての満足感などに基づく積極的な幸福感とは、べつで、この後者は、単に苦のないことという無の幸福ではなく、いわば有の幸福である。しかし、その積極的な満足としての幸福も、苦の「無い」ことのうちに捉えることができなくもない。積極的な幸福は、心身が積極的に満足でき、望みが満たされるということであろうが、その満足とは、その欲求・望みへの妨害がなくスムーズにこれが満たされることで、妨害があると、それは、苦痛となる。苦痛がないとは、つまりは妨害がなく、望み通りという積極的な満足状態が実現されるということである。とすれば、苦痛の無は、妨害がなく積極的な満足が得られるということを含むのである。それは、単に消極的な幸福を可能にするのみではなく、積極的な幸福をも可能にしていくということである。

こう考えると、苦痛・苦悩の無として幸福があるという主張は、かならずしも、消極的な幸福のみではなく、積極的な幸福も包含したものということができる。ただ、この積極的な幸福の積極的な満足の成り立つための条件(妨害の無)については、苦の無でとらえられるとしても、その快適さ・満足 of 積極的な内容・積極的な刺激を単なる無に還元することはできない。心地よいあたたかさは、単に不快な寒さがいないのみなのではない。温覚の刺激として積極的なものをもつ。感覚的な快さは、苦痛の無のみにとどまるのではなく、さらに、それを前提にしながら、あるいは、ときには、痛覚への刺激すらも含みながら、積極的な刺激として存在する。幸運のもたらすもの・恵みは、単に不幸・不運の無であるのみではなく、積極的に富みなり、手ごたえのある恵みが与えられて、幸福のために有用なものとして役立てられるのである。苦の無が即幸福だという説が、苦の無を超えた積極的なものを、別のものとして、そのものとしては、取り上げようとしない限りにおいては、幸福のもつ、積極的な満足・快適さ等は、その幸福からは、ぬけおちてしまうといわれねばならない。

ところで、欲求充足への妨害がなければ、満足がもたらされるが、このとき、積極的に妨害をなくするようにと立ち向かっていく方向に、つまりそとにめぐみなりさいわいを求めていくものと、欲求そのものを小さくしていくものとの二方向での満足の仕方が可能である。

積極的な満足・快適さを求める人は、欲求を小さくすることは考えず、そとにめぐみを、さちをもとめて行き、これに対する妨害を克服し障害を乗り越えていく方向へ向おうとする。だが、苦痛・苦悩をなくすればこと足りるのだと、無の方向に、いわば消極的な幸福を見い出そうとする人は、欲求そのものの方を小さくしていく方を選んで、禁欲主義的努力の方向に幸福を求めることであろう。後者は、おそらくは、欲求・欲望が人の災いの根源であると解しているひとになる。人に欲望があるかぎり苦悩はなくなることがない。際限なく欲望はふくらんでいくものであって、欲求充足にはきりがなく、その限り、苦悩は、やむことがない。苦痛・苦悩を無化するためには、その欲望・欲求を小さくしていくのが確かな方法となる。無欲となることである。幸福は、無欲になることにつきる。無欲のひとは、不満足に思うことがなく、こころ安らかであり、幸福の人となるのである。

ある程度のめぐみ・富みをもつものは、欲望には際限がないのだから、現状の富みに満足するために、欲望をそれ以上にしないで、これを制限し、それ以上については無欲になるとよい。だが、その日の食事にもことかくような者に対して無欲を求めてはならないで

あろう。かれの食欲は、生物として生存するためにあり、それを満たすだけの食料のめぐみがなくては、生きることそのものが不可能となる。ここでは、無欲による幸福ではなく、欲望を積極的に充足する富み・めぐみを持ち、これを享受することとしての積極的な幸福が存在しているのでなくてはならないであろう。

福沢諭吉は、江戸時代のしいたげられた人々が無に安んじていたその幸福を欺瞞的だと拒否し、客観的な富み・さちを土台にして「幸福」「平安」を求めべきことを論じている。富み・財がなくても、安らぎは得られるが、それは、主観的な幻想であり、ごまかしであって、しっかりとした文化的な豊かさの裏付けをもったの平安・幸福をと主張したのである。江戸期の貧困のもとでの平安を批判して、その満足とは、「足るを知るとは、他なし、足らざるを知らざりしのみ」(註7)と拒否し、貧しいのであれば、しっかりとそのことを自覚して、豊かになれるように努めねばならないとする。物心ともに向上し「高尚に達して」こそ真の「平安幸福」はある、幸福は「足らざるを知りて之を足すの道を求めるに在る」(註8)と論じている。江戸・明治の貧困を知る者の当然の主張であったといえよう。

単に苦痛・苦悩がないだけの、やすらかな幸福とともに、これとはべつに、めぐみ・富みを楽しむ積極的な幸福が存在するのである。無感覚のおだやかさもよいが、これとは異質のわれわれの感覚への積極的なところよさ、快楽、快適さがある。あるいは、清閑な空無の境地に瞑想するのは異質の、知的能力をかきたてその能力を積極的に発揚させこちよく興奮させる満足がある。それらは、無とはちがって、生の活発な高揚状態であり、積極的な恵みの享受になる。この積極的な満足に見合う積極的な幸福も、安らかな無欲の幸福とならぶ、もう一つの幸福になるであろう。

とはいえ、富み・さちは、得がたく、また、それへの欲望には際限がなく、これで十分ということがない。かりに多くの富みがえられたとしても、そのことへのめぐみをありがたいものとし、満足することがないなら、幸福感も生じることがない。その点、苦痛・苦悩さえなければ、それでよしとする、無欲の安らかな幸福は、確実にえられる幸福になる。無欲ならば、不満は生じず、痛みがなく安らかであれば、それがそのままに幸福となるのである。

### 3. 幸福に不幸は必要か

苦痛・苦悩がなければ、それがただちに幸福なのだという無の立場は、不幸がなければ、

それで幸福なのだという考えであり、幸・不幸は相互に対立し排斥しあうものとする点では、ごく一般的な考え方になる。だが、不幸は幸福と相容れないというこの考え方には、反対する立場の人達がある。幸福のためには、むしろ、不幸が必要だというのである。

ヒルティの『幸福論』は、不幸は、より高い幸福をもたらすものとして、必要だという。「不幸は、人生に必然であり・・・幸福に必要なのだ」(註 9)と。不幸には、当然の報い・罰として与えられたものもあるが、そうではなく、魂を「浄化 Laeuterung」(註 10)したり、「強化 Staerkung」(註 11)するために与えられているものがあり、このふたつは、人を「深化 Vertiefng」(註 12)させるもので、ひとをつくり、より高い幸福へと導くというのである。苦痛・苦悩を試練にして、不幸に耐え忍ぶことをもって始めて、高いところへと飛躍し、真の幸福・至福が与えられる、つまりは、不幸なくしては、不幸を持つことのない者には、真の幸福はないというのである。

重い障害をもった子供と生きる親は、まずはじめには、大変な不幸を背負ったことに悲嘆し、わが国であれば親子心中などが頭をかすめることも少なくないはずだが、この試練に耐えて生きていくなかで、やがて深い人生を生きることが可能になって、高い幸福の与えられることがあるという。どんな苦しみも、しだいに慣れていくことができるということであって、不幸をそれとして感じなくなってしまったのだといえなくもないが、必ずしもそうではない。苦悩のなかで、鍛え上げられて、その障害児があたえられなかったならば得られなかったであろう質的に高く深い人生を得ることができるようになり、真に幸福な生を獲得することがときに可能となるものようである(もちろん、そうたやすいことではないであろう)。

たしかに、平々凡々と幸福に生きているものには、平板なこの世しか見えず、そのぬるま湯からでることができないままに終始し、この現実を打破して、飛躍しようという意欲は成立しにくいことであろう。不幸な者は、反対で、この現実苦しめられ不満な者なのであり、飛躍・逃避いずれにせよその現実から脱出しようと必死になる存在である。不幸を通してはじめて見えてくるこの現実の否定的側面とそれを超越した別世界の理想がある。不幸な者のみが真剣に求めうる、幸福な者の思いついたりえない理想がある。この理想的なものを得ることができるのは、これを知る不幸な者のみとなり、その理想を獲得しての至福は、かれのみに可能な幸福となる。

江戸期の禅僧に白隠という人があったが、かれは、「南無地獄大菩薩」と、一見、不吉・不見識とも思えるようなことをいった。だが、それは、確かに理にかなった言葉である。

小さくは、この世の地獄の苦しみを体験した者には、平凡な質素な生活も安らかな極楽浄土と映るといふことがある。さらには、不幸な地獄の体験をするものこそは、死にもの狂いで救いの世界を求めることになり、かれこそが悟りをえ、仏の世界に飛躍できる、つまりは、至福をえることができるのである。この世俗のなかで幸福なものは、命をかけてまでも宗教的な悟りに固執しようとは思わないことであろう。地獄の現実にあえぐ不幸なもののみが、やすらかな仏の世界に飛躍するために、その命をすててもと修行につとめ、結果、悟りの至福をわがものにできるのである。この世の不幸がこの世界のかべをつきやぶらせてくれて、理想的世界の幸福へと道を切り開いてくれるのである。地獄の体験は、有り難いことだったのである。

ところで、ヒルティが不幸が高い幸福には不可欠だというのは、キリスト教でいう「山上の垂訓」の、いわゆる「八福 Beatitudes」をふまえてのことである。周知のようにイエスは、そこで至福への道を説き、そのなかで不幸こそが至福への大道なのだと主張している。つぎのようにいわれている。

「あなたがた貧しい人たちは、さいわいだ。神の国はあなたがたのものである。」

「あなたがたいま飢えている人たちは、さいわいだ。飽き足りようになるからである。」

「あなたがたいま泣いている人たちは、さいわいだ。笑うようになるからである。」

「人々があなたがたを憎むとき、また人の子のためにあなたがたを排斥し、ののしり、汚名を着せるときは、あなたがたはさいわいだ。」

(『ルカによる福音書』 第6章 20~22)

貧しく、飢えていて、悲しい思いをし、人からののしられていて、つまりは、不幸な目にあっているものは、「さいわい」だ、幸福だというのである。ここにいわれる「さいわい」(ギリシア語で *macarios*、ラテン訳で *beatus*)は、普通の「幸福 *eudaimonia*」ではなく、最高の幸福、至福である。英訳では最近のものは、*happy* としているものがあるが、古典的には「*blessed*」で、独訳では「*Selig*」とされていて、いずれも、単なる幸福 (*happiness*, *Glueckseligkeit*)ではなく、最高の幸福としての「至福」を意味する言葉になっている。貧しい者は、悲しんでいる者は、つまりは、不幸な者は、最高に幸福だ、至福だというのである。

『ルカによる福音書』は、つづけて、反対に、富んでいる者、満腹している者、笑っている者、ほめられている者は、つまりは、幸福な者は、不幸だというような内容のことも



言っている。富んでいる者は、もう慰めを受けており、満腹している者は、飢えるようになり、笑っている者は、悲しみ泣くようになるからそうなのだと理由づけている。これは、敗北者・恵まれない者の妬みや負け惜しみとして、ルサンチマンに発することばとして、しばしば、聞かれることであるが、それには限られない。幸福な者は、満たされている者だが、人の欲望には限りがなく、現状維持ですぐに不満となるから、早晩、不満足となって、不幸となるのである。この主張は、そのかぎりでは、世俗的でもあり、特殊な主張ではない。

だが、貧しく飢えて、悲しんでいる不幸なものは、幸福だというのは、世俗においては、幸福な者が不幸になるように簡単には、そうはならないから、奇異にひびく。飢えている者は、かならずしも、満たされるようはならず、いつまでもそうであったり、飢え死することもまれでない。貧しいものもそうである。不幸なものは、いつまでも不幸である方がふつうのことである。もちろん、彼らは、いつまでも不幸をなげいていることはない。やがて、その不幸にも無感覚になりうる。しかし、それでも、まさか、無感覚からさらに進んでこれを幸福だというようになることは、世俗の感覚を失うことのないかぎり、ないであろう。

ただ、不幸な者は、これに課せられる試練によって鍛えられ、現実を越えた理想などが見えてきたり、これへと飛躍するエネルギーを獲得できるというようなことであれば、「貧しい者は、さいわいだ」といっているのは、分らなくもない。「神の国はあなたがたのものである」ということは、おそらく宗教的な真実である。貧困にあえぐものには、神の国が憧憬され、神のもとへと自身を投げ出していく用意がこの世で幸福な者とちがってとらわれなくできるであろうからである。飢え、悲しむ者についても、いつまでもなく、神の国において満たされ笑う事になり「さいわいだ」となるのである。神は、救いをもとめてやまない不幸にあえぐ者こそを救い、幸福にするのだということであれば、宗教的主張としては、ありきたりのものになるかもしれない。

「飢えるものは、満たされ」「悲しむ者は、笑い」「不幸な者は、幸福になる」ということは、「不幸をばねにして」ということであれば、世俗の真実でもあろう。飢えているものは、その欠乏に対して真剣に立ち向かい、これを克服しようと努力する。だが、満ち足りたものは、その努力をおこたることであろう。やがては、飢えていた者が満ち足りたものとなるわけである。悲しむ者は、その悲しい喪失をなんとかしようとし必死になる。喪失したものを再獲得する努力をするかもしれないし、喪失の不可避なことに諦念し安らげる方

法を見出す模索をつづけるかもしれない。幸福に笑って過ごしているだけの者とちがって、つぎの試練のおとずれたとき、悲しんでいた者は、安らかに微笑んでこれをやりすごすことが可能となろう。

ヒルティは、不幸が至福に結びつくものであることを、根本的なところからは、神とのかかわりから説いて、つぎのようにいう。つまり、不幸・苦しみのなかでは、ひとは、「神の近く」(註13)にいることになるのだと。与えられている苦しみは、神が自分に「使命」として与えているものであり、その苦しみにこそ、神からの「選びの証明」(註14)がある、苦悩の試練に耐えて鍛えられて強い人間になるということのみではなく、いうなら苦悩それ自体が神からのものとして意味深いものであって、至福なのだ論じている。白隠が「南無地獄大菩薩」といったのも、地獄の苦しみにおいて、ひとが、平々凡々と生きている者とちがって、悟りの世界の間近かにあることを示したものだっただろう。

#### 4. 苦しみは、幸福への大道か

不幸は、かならずしも苦勞や苦悩と一致するものではないが、苦痛・苦悩をともなう「苦勞」は、とくに若いときのそれは、その人ののちの成功・幸福のために役立つことが多い。

「若いときの苦勞は、買ってでもせよ」といわれる。はじめに不足状態におかれていると、それが基準となるから、あとに少しのめぐみがあっても、これをありがたいと思い、満たされて幸福感をいただきやすくなるというようなこともあるが、「苦勞」は、そういう消極的な意味で有効なだけなのではない。苦勞は、単なる不足・不満足状態ではない。それは、妨害・障害など困難なものに向かって挑戦して、これを克服していこうという姿勢をもつ。障害とそれの克服に辛抱強く耐え、目的に向かって強固に意志を貫徹していく能動的積極的なものである。その困難に耐える忍耐の持続・不屈の意志の反復が人を鍛え上げ、「人をつくっていく」のである。ひとの筋肉は、鍛えればたくましくなっていくが、安楽に過ごしているとたちまちに無力な脂肪に墮す。ただし、その苦勞は、当人をおしつぶしてその能力の芽をつみとるような悲惨なものであってはならない。むずかしいところであろう。

幸福は、その度がすぎるとひとを浅薄にすると、よく言われる。家の繁栄は、そう何代もつづかない。三代目は、家をつぶすものとの相場である。幸福に豊かなめぐみにおぼれて、享樂するのみの無能者をうみだすことになりがちなのである。

ただし、先代の成功を土台に一層の繁栄を築き上げる人もある。幸福は、一層の幸福をよぶ。また、薄幸の子は、苦勞のし通して、みじめに生き、みじめにこの世を去ることの

方が多い。不幸は、一層の不幸をよぶのである。めぐみを一層生かしていくことができるか、苦労をみのりあるものにしていけるかどうかは、その当人の生来の資質におうところが大きい。その資質こそが最大の「めぐみ」になるということであろうか。

メルヘン(昔話)は、幸福をもって「めでたし、めでたし」と結ばれる。では、始めから終わりまで幸福なのかというと、そうではない。幸福な終わりを迎える前には、かならず、不幸なというか、苦難にみちた過程・展開がある。幸福にのみ終始していたのでは、聞き手・読者は、納得しないことであろう。幸福は、不幸をもってはじめて可能になるものと、ここでは前提されているのである。

現実においては、幸福な結婚というハッピーエンドには、先立つ幸福な青春があり、なにより幸福な誕生があるものである。幸福な恵まれたうちに生まれた者は、幸福なうちをつくっていくのである。逆に、不幸な生まれ、みじめな青春をおくるものにまうちうけているのは、特に女性のばあい、一層あわれな結婚生活であって、ハッピーエンドは、せいぜい最期のやすらぎ・死を迎えるときぐらいであった。不幸を耐えぬいて、幸福な結婚をというメルヘンの展開は、現実にはそういうことはほとんどないがゆえの、不幸な者たちの、あわれな「白昼夢」というのが普通であった。

シンデレラ姫は、灰まみれになり、泥まみれになってみじめな青春をすごした。女性の人生の一大転換のときとなりうる結婚に、はかない夢をたくしながらである。シンデレラは、その夢を実現した。だが、現実世界のシンデレラたちは、幸福に生まれ幸福な青春を謳歌し幸福な結婚をしたお嬢さんたちを横目に見ながら、おそらくは、一層みじめな結婚生活を強いられて、一人のときはよかったと思い出しながら、のんだくれで粗暴な夫や彼の息子の愚行に悲嘆し絶望しながら老いていくのである。メルヘンの夢は、現実にははたせないことを、まさに夢のなかで実現してみせてみせているのであろう。

メルヘンのハッピーエンドは、苦労をし不幸にたえぬくならば、きっと幸福な将来が開けてくる、「だから、頑張りなさい」とはげますために、希望をいだかせるためにあるのだといわれることがある。精神的に病んでいるこどもを元気づけるためにメルヘンを利用しているひとたちにおいて、とくにそういうことがいわれている。悲劇的なもの、不幸に終わるメルヘンは、駄作で、子供には、聞かせるべきでないともいわれることもある(わが国の昔話は、悲劇的な結末をもったものが少なくない。リアルである。人生の真実を知るためには、不幸な結末も語られてよいのではないか)。こどもを元気づけるということでは、確かにそうかもしれない。現代のメルヘンは、子供専用になっているから、そういう解釈

をしてもいいのであろう。だが、かつては、メルヘンは、おとなの楽しみであり、なぐさみであった。しいたげられた庶民のおとなのである。ここでは、まずあったのは、不幸の現実、みじめな青春であったろう。メルヘンは、その不幸の現実をなぐさめるものとして、つまりは、幸福な結婚は、ありえぬ夢であり、せめて夢のなかだけでも楽しみたいという、(希望のアスピリンではなく)度数の高いウォッカとして機能していたというべきではないか(もっとも、どんな苦難の状況に陥っても、ひとには、優れた適応能力があり、それにしだいに慣れて、悲しみや苦しみもそれとしては感じなくなっていく。耐え切れなくなると、人格を分裂させて、その不幸を他人ごとにしてしまう能力さえもっている)。

とはいえ、幸福な結婚生活を現実のものとするものも存在していたし、男子の冒険物語は、そのハッピーエンディングは、王女と結婚して一国の主になるほどの成功は、まれであったとしても、艱難辛苦のすえ、一家を築きあげ、一家の主となることは、多くの若者の尋常の道であった。その成功物語は、現実的なものであったろう。幸福な人生を獲得するには、まずは、苦労に不幸にたえて、勇気をふるい、意志強固に目的を実現していかなくてはならない、「若いときの苦労は、買ってでもせよ」と鼓舞するものだったといえるのであろう。

われわれの心性のうちには、因果応報的なのというか等価交換というか、そういうたぐいの平衡・釣り合いを求めようとする傾向がある。この心性は、おそらくは経験的に、つまり幼児の一般的な体験からしだいに形作られていくのであろうが、どうも、人類にとり根深くもっと根源的なものを感じられる。人間の思考の先天的なパターンとしてあるのではないかとさえ思いたくなる。農工業を土台にした日常活動は、「苦労すれば報われる」という、手段(原因)と目的(結果)の等しさを反復し、利害の等しさという応報や、相互に利益をえて損をしないという等価交換を反復してきたが、擬人化して世界を捉えがちのわれわれは、これを世界そのものの原理とし、因果応報・等価交換を世界の根本法則とみなすようになってきたのであろうか。等しいものに等しいものがふさわしいという、平衡を愛する傾向性である。それに基づいて、現在、多大の苦痛にたえ修行しているなら、結果にはそれにふさわしい大きな呪力が獲得されるに違いないと考えたり、現世において悲惨な目にあっているとしたら、おそらく過去世において、それに見合う罪なことをしたにちがいないと、冷たく「因果応報だ」とつきはなして捉えるのである。

この平衡愛好の心性は、ハッピーエンディングのメルヘンにおいては、幸福な結末を得られるからには、それに見合う、それを作り上げるだけの苦労が、場合によるとそれに見

合う不幸が先行していなくてはならないと考えるのである。バランスが前後でとれないと、この心性は納得しないのである。苦勞するということがあってはじめて、それにふさわしい幸福の果実がなるのだというわけである。しかし、現実はそうではなく、幸せに生まれ、幸せに成長し、幸せな結婚をして(逆に薄幸な者は死ぬまで薄幸)、ということが多い。このとき、平衡愛好の心性は、納得がいかないので、前世によほどの功德を積んだのだらうと(逆に、情け容赦なく、溺れる犬に石をなげつけるように、過去世の悪事をでっち上げて)、つじつまを合わせていくのである。

なお、多くのメルヘンの主人公は、まずは、幸福な王子・王女として生まれる。その展開は、幸福ー不幸ー幸福というトライアードになる。はじめの幸福な誕生は、どんなこどもでも、生まれてしばらくは、あたかも王子・王女のように哺乳・保護されるということと重なるが、何と云っても、つぎの不幸を不幸として意識していくために必要だったのであろう。シンデレラのような苦勞は、庶民には、当り前のことがらで、苦勞でも不幸でもなかった。これを不幸として感じさせるには、まずは、「幸福」が先行して語られねばならなかったのである。さらに、幸福ー不幸を経て幸福になるのは、もともとの幸福に帰るのだという、還帰の円運動に心の落ち着きを感じるべつの心性、つまり、帰る家をもち(青年期までのこどもは大抵がこれを日々反復)、帰る故郷をもっていた人間の心性も安堵させ満たしていたのである。

## 5. 不幸が幸福を輝かせる

不幸と幸福は、相関概念である。不幸は、幸福の反対として、幸福は、不幸の反対として理解される。その点では、つまり、幸福を認識していくためには、幸福にとって、不幸は不可欠となる。しかし、それは、幸福の概念を捉えるために不幸が必要なだけのことで、幸福であるために不幸が必要なことにはならない。健康概念の理解には病気が必要だが、健康であるために、病気になる必要がないのと同じである。

だが、健康の喜びは、病気から解放された当座にのみ感じる。痛みがなくなった当座にのみ、健康の心地よさを感じることができるのである。健康には病気は必要ないとしても、健康を意識するのは、病気から回復したときとなるから、健康の自覚には、病気が必要ということもできる。幸福も、同様で、不幸があつて、それから解放されて当座のみ、つまり、不幸の克服において、これを前提にもつてのみ、幸福と感じられるのである。先立つ不幸が忘却されてしまうと、その幸福になれてしまい、幸福も感じなくなるものであろう。

苦や痛みが無い、「苦痛がない」ということに幸福の見い出されるような場合、苦悩・苦痛を実在的にせよ観念的にせよ前提して、これを無化する過程をもつことになるから、ここでは苦痛・不幸が幸福の前提に存在していなければならないのである。

幸福を自覚するためには、実在的にせよ、単に観念的にせよ、なんらかの形で不幸が必要といえるのかもしれない。幸と不幸は、健康と病気と同様に、その相互の比較において、意識されるということである。だが、その比較は、自分自身のうちに限定することはないのではある。他者の幸福や不幸が比較の対象となってもよいのである。しばしば、自分たちの幸福は、周囲の不幸をもって意識するものである。「とりのご主人、肝臓がんでまた入院だって」と言いながら、「うちのひとは元気なだけでも、幸せだわ」と思うのである。幸福であるために、自身が不幸である必要はないのである。

しかし、知識として知っているのみでは、人生の深い理解はできないもので、体験してみなくては、本当のところは分からないことがある。不幸にしても、そこから見ているのみでは、その万分の一も理解できないのではないか。自身が不幸になってのみ、不幸の重みも実感できるのである。とすれば、人との比較ではなく、自身の不幸体験において不幸の何であるかをしっかり捉え、その深い体験のもとに、それから解放されての幸福を、それこそ不幸の詳細に対比しつつ、幸福の詳細を意識できるということになるのではないか。真実、幸福となるには、それをしっかり自覚するには、やはり、自身が不幸を苦勞を体験していることが必要なのかも知れない。

さらに、その不幸によってつぶされることがなければ、これに挑戦することをもって、そのひとは、大きく飛躍していくことが可能になるのである。不幸は、「ひとをつくる」のである。苦勞と不幸は必ずしも一致しないが、ある程度は重なるものであろう。苦勞することでひとは、鍛えられる。しかも、単なる人並みの苦勞ではなく、恵まれない、ただならない不運の禍いに苦しめられるといった、つまりは、不幸といわれるべき厳しい状況のうちにおかれた者は、これに打ち負かされたり諦めてしまうことがなければ、この不幸を大きな飛躍の好機とすることができる。この不幸にへこたれず挑戦し忍耐しつづけていけば、ひとには本来大きな順応・適応能力があるから、かれは、やがて、並外れた人物に変身して、卓越した成果をさずかる事が可能になるのである。キリスト教が不幸を至福への大道とみなし、白隠が「南無地獄大菩薩」といったようなことが人生にはたしかにある。不幸はこれに耐えぬいたものに至福をもたらすということは、おそらく、かなりの状況において、真実のことばとすることができるのではなかろうか。

註

- 1)Vgl. Arthur Schopenhauer Saemtliche Werke. Wissenschaftliche Buchgesellschaft. 1980. Bd. 4. S. 483
- 2)Georg Wilhelm Friedrich Hegel ; Enzyklopaedie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse. 1830. 、479
- 3)Immanuel Kant ; Kritik der praktischen Vernunft. 1788. S.224.
- 4)Schopenhauer; ibid. Bd.4. S.484
- 5)佐藤一斎 『志言臺録』 154(『日本思想大系 46 』岩波書店 1980年 188頁)
- 6)佐藤一斎 『同上』 143(『日本思想大系 46 』岩波書店 1980年 187頁)
- 7)『福沢諭吉選集』 岩波書店 1981年 第3巻 283頁
- 8)福沢 『同上』 第3巻 284頁以下
- 9)Carl Hilty ; Glueck. Verlag Huber &Co. AG. Frauenfeld. 1951. Erster Teil. S.205.
- 10)Carl Hilty ; ibid. Erster Teil. S.207
- 11)Carl Hilty ; ibid. Erster Teil. S.207
- 12)Carl Hilty ; ibid. Erster Teil. S.207
- 13)Carl Hilty ; ibid. Dritter Teil. S.139
- 14)Carl Hilty ; ibid. Dritter Teil. S.138

平成 11 年 12 月

『広島大学文学部紀要』 第 59 卷 41~59 頁